

No. 387【2019年12月20日配信】

進藤堰に関する新史料(担当:工藤)

こんにちは！ 室長の工藤です。

今から3年前、平成28年(2016)10月7日に配信の「あおり歴史トリビア」229号で、私は「進藤堰」について取り上げました。堰とは川から水を引いて農業用水を確保する施設で、進藤庄兵衛という人物が造った堰なので「進藤堰」といいます。

進藤堰は「荒川の堰から新しい堰を通し、青森近郷の用水」を確保するもので、荒川から引いてきた水は現在の柳町通りにあった「毘沙門堂」の辺りから東西方向に延びていると説明しました。そして、堰の開削は延宝6年(1678)～翌延宝7年の間に実施されたと結論づけています。

近頃、進藤堰について新しい史料を発見しました。宝永元年(1704)12月、青森町の漁師頭窪田三郎右衛門は沖館村領・大野村領・荒川村領などで新田開発をしたいと藩庁に申し出ました。漁師頭は外浜・青森の漁師を束ねる役割を与えられており、新田開発とは結び付かないように思えます。実は、元禄4年(1691)から漁師頭の職掌が縮小され衰退傾向にあったのです。窪田はそうした状況から抜け出るために、新田開発に目をつけたのです。

開発自体は享保4年(1719)12月までに41町歩余りを完了しています。そしてこの時、進藤庄兵衛が造った堰を活用しているのです。窪田の言うところによれば、進藤は野沢村の用水不足を解消するために荒川からの新堰普請を行ったといい、開削の年代は「延宝七年之比」でこれは私の想定と一致します。また、荒川から引水していることも分かります。

一方、この堰が青森町まで延びていたかどうかについては分かりません(沖館方面には延びていないだろうとは思いますが)。しかも、進藤の開削による堰の先には仁右衛門堰が繋がっていました。そして窪田は仁右衛門堰をさらに130メートルほど延ばし、幅約1.2メートル、深さ90センチメートルの堰を造る計画でいました。つまり、進藤庄兵衛が開削した堰は約40年の間に、少なくとも2度延伸している可能性があるのです。ですから「進藤堰」は、後世の人にはこの延伸部分も含めて伝えられるかもしれない…考えなくてはならないことがひとつ増えました。

ひとつ分かれば、ひとつふたつと分からないこと(疑問)が増えてくることは、よくあることです。ちょっとずつ進みながら、いつかは全体像をつかみたいものです。



進藤庄兵衛ゆかりの地の解説板(廣田神社)